

---

# 最後の権利

葵夢幻

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
最後の権利

【Nコード】  
N1211D

【作者名】  
葵夢幻

【あらすじ】  
男が目指す場所はただ一つ、それは最後に自分が望んだ権利だから。

正式な名称は分らないが、私は点滴がぶら下がっている物を音を立てないように細心の注意を払いながら暗い廊下を歩いている。

時間は日付が変わった頃だろうか、窓から差し込む月明かりと頭の中にある記憶を頼りに私はそこを目指していた。

第三者が見たら不審人物以外の何者でもないがしかたない、私には時間が無いうえ誰かに見つかるわけにもいかないからだ。

だからと言って私は泥棒などの犯罪者ではない。だいたい点滴を受けながら泥棒をする奴などいない。もしいるのなら見てみたい気もするが、今はそんなことはどうでもいい。

とにかく私はこの建物、病院の屋上に行かないといけないんだ。

途中、私は壁に寄りかかり休憩をする。

自分の体がこんなに重いとは思わなかった。奴隷が付いている足枷の重りが付いているみたいで歩くこと自体が辛いし、呼吸は荒くなり疲労感がもの凄いい。

正直もう動きたくない。

けど行かないと。

別に誰かに言われたから行くわけじゃなくて、自分で行かないと、いや、そうじゃないか、自分で決めて選んだから。だから行かないといけないんだ。

深呼吸をして息を整えると私は再び歩き出した。

重い扉が開き涼しい風が肌を通り過ぎる。

このルートなら誰にも見つかることは無い。

私は非常口からだと踊り場から夜空を見る。

そう、あそこ、本当はあそこに行きたい。けど時間も力も無い、今の私にはどうする事も出来ない。

だから、だからこそ私は歩き続けなければ、この階段を上らないと。

点滴がぶら下がっている物を静かに一段ずつ上に上げながら、私は階段を上っていく。外にある非常階段だからか鉄製で音が鳴るものの、風がその音を消しえくれる。おかげで私はあまり周りを警戒することなく、気軽には行かないが安堵しながら階段を登り続けることができた。

そして辿り着く最後の難関、屋上への扉だ。

鎖を巻くほど嚴重ではないが南京錠が掛けられている。まあ当然だろう、好き好んでこんなところに来る奴ほど警戒が必要だ。それと先に言っておくが私はそういう類の人間ではない。少なくとも飛び降りようとは思ってないから、というかそんなことをする人間の気が知れない。

さて、それはさておき、まずは南京錠を何とかしないといけない。そこで私が取り出した物、ジャジャー、ハリガネ……ではない。残念なことに私はそこまで器用じゃない。一度やってみたい気もあるけど、私が取り出したのは鉄を切ることができるハサミのような物、もちろん名前は知らない。

まあ普段使わないから名前なんてどうでもいい、点滴を吊るす棒とか鉄を切るハサミとかは。要は南京錠を壊して屋上へと行ければいいのだから。

屋上にはシーツ等を干す物干し竿や看護士の休憩用だろうかベンチまだ置かれていた。

私はベンチ腰を下ろし再び夜空を見上げる。

この病院は山奥にある為、星達が良く見える。

そいつはそうだろう、私はこの夜空の為に、わざわざこんな山奥

の病院へと来たのだから。この夜空が見えない都会の病院だと意味は無い。

たった一つ、私は命の冒涇とも言えるわがママを貫くために、こんな山奥の病院へと入院したのだから。

私は点滴の針を外した。

外れた針の先から液体が流れ落ちる。たぶん抗がん剤だろう、なにしろ私の髪は抜け落ち、体にはシミのような物ができている。抗がん剤の副作用、つまり私は末期がんに侵されている。病名は白血病らしい。

そしてもう打つ手は無い、どうやっても助からないんだ。だったと……私は夜中に病室を抜け出してここにきた。

万が一、いや、数億分の一の確立で助かるかもしれない。けど、私はそんな低すぎる確率にすぎり、あまり意味の無い日常を送ることとはできなかった。

死にたいわけじゃない、生きられるなら生きたい。でも、これ以上生きても自分が望んでいる物を手に入れないなら、自分の命を賭けてでも手に入りたい。

命の冒涇、生きることへの諦め、なんと言われようと構わない。自分のわがままだということも分かっている。けど、たとえ誰が何と言おうとも、私にはその答えしか出せなかった。

どうしようもない、そういう生き方しか……私は出来ないのだろう。そして出した答えがここ。

本当ならその遙か先が良かったのだけど、今の技術では無理のようだ。だから一番近い場所で……私は死にたかった。

つまり私の死に場所を選びたかった。

それは夜空が見える。都会とは星の数が違いすぎるほどの星が見える夜空、その向こうへはいけなけれど今はここがいい。

余計な光が無いから星が良く見える。

星ってこんなに多かったんだな。今まで都会の夜空しか見たことが無いからまったく気付かなかった。

最初ははつきりと見えていた星の光も少しずつボヤけて行き、  
…消えてしまった。  
そして私は夜空の向こうへと旅立つ。

## （後書き）

PC内を整理してたら出てきた前に書いたお題小説です。

まあ、特に載せる必要も無かったのですが、とりあえず掲載してみました。特に意味はありません。

……悪いかー！ 意味のないことをやって悪いかー！

……というか、いい加減にキレるのも飽きてきました。ならやるなよと突っ込んだ方、ならやるなよと突っ込んだら負けです。とかそんな突っ込みでお笑いの頂点が取れるかー！ 突っ込むんだったら個性を出さんかい、ボケ！

さて、そろそろ飽きてきましたので締めたいと思います。

では、この作品を呼んでくださりありがとうございます。

そして他の作品もよろしく願います。更に評価感想もお待ちしております。

以上、お笑いの頂点を目指しきれなかった葵夢幻でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1211d/>

---

最後の権利

2010年10月9日01時56分発行